

“大学に行きたい”願いにこたえて

——進路指導部から見えること——



三ツ井 富士夫

大学進学率向上をめぐる本県の状況は、八木論文に示される指摘の通りと思われる。高校で直接生徒や父母にかかわりながら感じとれることをまとめようと思う。大学進学指導を前面に出して取り組むことは、人格形成を阻害し、「全人教育」に反し、また、

成績（点数）による「差別・選別」を一層助長することになりはしないかと思ひ悩む教員は少なくない。特に、大学進学指導の結果が、その指導内容の

是非より、国公立大学に何人、有名私大へ何人合格したかで評価される風潮の強い状況の中では、受験競争に学校が埋没しかけないという不安も大きい。生徒父母の、大学に行きたい・行かせたい・願いにどうこたえるかの板ばさみで、ゆれ動いている。

生徒父母の様々な思い

「先生、旅行インストラクターになるにはどういふ学校に進学すればいい

ですか」「産業デザイン関係を勉強したいんですが、〇〇大学は無理そうなので、他の大学にしたいんですが、どこの大学がいいですか」「私は、△△大学の不動産学部の指定校推薦を受けたいのですが、親は聞いたこともない、ランクの低い△△大学など出たってどうしようもないというのですが、どうしたらいいでしょう」などと、三年生を中心に毎日のように進学指導室にやってくる。クラス担任に相談しても、

なお不安なのである。なかには、ランクにこだわったり、何をしたいのかはつきりしないが国公立大学へという生徒同士の会話も耳にする。

三年生は、二年間の勉強の結果（大方は必要な勉強をしていない）や、やっと本気になって将来を考えた結果からのことである。担任として三年間つきあっていると、一、二年でどんな学部へ行き、どんな事を勉強したいかがはつきりしている者は、一割いるかないかが実情である。あるいは、大学名も、新潟大学などの国公立大学や、東京六大学くらいしか知らない者も少なくない。

また、父母の思いは、一、二年では、何とか、地元の新潟大学へというのが圧倒的に多い。しかし、三年では、子どもの勉強ぶりや成績から、「せめて大学教育を受けさせたい」、「子どもの良さが生かせる方向へ」と、他大学へと目を向けはじめるケースがほとんどである。親にとっても今の大学進学競

争の厳しさは、直面して実感するといふのが実情のようである。

新潟大学の学部説明会の後の懇談会で、ある教授が、「その気になって少しがんばって勉強すれば新潟大学に入るのはそう難しくないと思っていたが、高校生の子どもを持っではじめて、最近の大学受験の厳しさを知った」と言う言葉が印象に残っている。

進学指導の現状

県内の状況で考えてみると、旧制中学からの進学校以外では、進学者の多い学校でも、放課後補習や学習合宿等、進学指導が学校の中で特に大きな比重を占めはじめたのは十年前くらいからのことであり、その前はどの学校でも、分掌の仕事では生活指導（生徒指導）が中心であり、学習指導では生活指導と密接に関連する成績不振者指導が主要であった。

私の勤務校でも、夏休みの補習や学習合宿、あるいは、三年生の三者面談

などの進学指導が体制的に整備されたのはほんの数年前からである。

新潟市内の場合、進路指導部や学年が中心となった進学指導の状況を上げると次ようなものが共通に上げられる。

① 進学ガイダンスの実施と進路の手引き、学習の手引き、進学資料集、進路ニュースの発行

② 進学講演会（生徒向け、父母向け）、進学講習会（受験学習指導、小論文講習など）の開催

③ 長期休業補習（夏、冬、春に各五～十日間）、学習合宿（夏休み）、平日放課後補習、早朝補習などの進学補習

④ 校内実力テスト、校外模試の実施
⑤ 三年特別授業編成（三年の十二月頃から）

⑥ コンピュータオンラインシステム
の導入（主に進研ファイナシシステム）
⑦ 生徒個人面談、父母面談、三者面

談などの相談・指導
⑧ 進学資料室の設置

以上の他に、どの学校でもカリキュラムが進学にシフトし、二年次からの

文系、理系コース設定が進学校では一般的になっている。

これらの指導の中で、生徒達の進学意識は高められ、勤務校でも三年の初めに受験校を具体的に決めていくようになってきている。しかし、後でも触れるように、日常の自宅学習や予習習慣の弱さはなかなか解決されない。

他県に比べて

大学進学率が低いのは、「本県の高校教員の熱意がないからだ」という声は、「大学等進学率向上対策事業」の「大学進学等推進会議」や「大学進学フォーラム」、あるいは、他県で年間進学指導研修してきた教員の報告などで目立っている。

新潟国際情報高校を除いて、本県の高校では、近県の山形や福島、あるいは富山、石川に比べてきわめてゆるやかな「受験指導体制」であるのは事実

である。

いくつかの例をあげると、県内では、進学補習は強制でなく希望者参加が実態であるが、富山、石川などの県外では、「補習」は全員強制参加で、実質始業前〇時間目、放課後七時間目授業となっている。

また、今問題となっている学期末考査後の自宅学習日を解消する問題でも、他県では自宅学習日は少なくとも進学校では存在せず、一、二年次の三学期は小・中学校同様三月二十四日まで授業という所が多い。従って、本県と他県では三年間で授業日に三ヶ月弱の差が出る。

県立新潟国際情報高校では、本県高校生一般が自宅学習一時間であるのに対し、自宅学習四時間をめざし、毎日の宿題プリント、朝テスト、自宅学習日課表提出、教師による点検等が取り組まれている。また、業者模試による実績づくり（模試の事前テスト、事後テスト）などの推進は、生徒の自発性

にまつのではなく、目に見える点数で自信をもたせながら学習を誘導徹底させていくシステム（これらは岐阜の「可児高校」方式と言われている）である。教員の長時間過密労働（「奉仕の精神」に耐える「熱意」に支えられた、徹底した「点数主義」指導、管理主義指導（可児高校での研修教員は、管理が徹底され、生徒が自発的に管理に従うようになれば管理主義でないとしている）である。生徒は、学校の設定したルールに乗ることで、模試の成績が上がったという安心感と県内のトップに立ったという学校のプライドを持ち、学校の指導に積極的に応じているようである。「長時間詰めこみ教育で自主性を失った暗い生徒」像の批判的予想に反し、「明るく自信に満ちた生徒」の姿が、新聞、テレビで報じられている。そこに、自信と活力に満ちた企業戦士の姿が重なるように私には見える。

八木論文で指摘された、教育予算や

施設設備、教員数、小・中学校での数学の学力の弱さ等々をぬきにしたら、長時間・過密労働Ⅱ「奉仕」を進学率向上と直接させた、高校教員の「熱意」では、事態は解決されないであろう。

他県状況については、「日本の科学者」(一九九四・VOL29、日本科学者会議)の村上論文の一読をおすすめする。

何のために大学へ

私の勤務校の普通科は、県内では、俗に「進学三番手校、四番手校」と言われている。二年次の調査で、約九割が大学・短大を希望しており、大学志望の五割以上が国公立大学(主に新潟大学)を占めている。一方、二年次の生活学習実態調査(六月実施)によると普通科生徒で、毎日の自宅学習が平均三十分未満(実質、家に帰って何も勉強しない、テスト前だけの勉強)の者が三〇・四〇%であり、三時間を越えるものは五%以下である。

学習実態から見ると、生徒の希望を文字通り実現させることは不可能であるが、少なくとも、「大学へ行きたい」という、生徒・父母の希望の強さを受けとめている。学力不足から志望を大学から専門学校へと変わる場合もあるが、近年この傾向は減少している。

生徒や父母とのやりとりを通して感じられるのは、「一流大学を出て名のある会社へ」という思いと同時に、「今の時代だから、大学を出ておきたい」という思いも強いことである。

「偏差値ランクの低い大学でも、大学を出ておいた方が良いでしょうね、先生!」と言う問いかけに、とまどう教員も少なくない。教員の気持ちや親の気持ちの中に、「学力もなく大学へ行っただけが身につくのか」、「聞いたこともない大学に高い学費を出して何のメリットがあるのか」という思いもある。三年担任の時、「××大学に一千万円をかけて、それだけの価値があるのでしょいか」と問いつめられ、答えに窮

したことがある。

学問追及の場としての大学ということではなく、これと言って何もない自分が「自分にはこれがある」というものを身につけられるのではないか、将来の就職や生活にエリートになるというのでなくともプラスになるのではという思いを持つ生徒が多い。ここには、高学歴志向を単に「学歴社会」への対応というのではない、高度化する技術・情報社会を積極的に生きる上で、より高い教養・知識・技能をという国民的要求の一面を感じとれる。

「高校全入」の社会的意味と同様に、四割を越える大学進学率、多様化・大衆化する大学の変化も含めて、大学教育の社会的意味を問い直す必要を感じる。大学の「改革再編」の進む中、大学進学指導は、かつての「学問追及の場、最高学府としての大学」という一般的なとらえ方では進められないことを日々実感している。国公立大学何人合格、有名私立大学合格を目標にするだ

けの進学指導では、生徒・父母の多様な進学要求にこたえられないだけでなく、大学進学の意味を見失わせることになろう。青年期により高い教養、知識、技能を十分身につけることが、ますます重要な時代になっている。国民的要求の側面から考えたとき、高すぎる学費の問題や奨学金制度の充実が大きな課題となろう。

「受験学力」

入試センター試験は、制度のあり方は否は別として、多くの大学教官は「この程度の知識は」と肯定的である。実際、勤務校での生徒の学習・学力を考えたとき、入試センターの内容は教科書・授業レベルを身につければ対応でき、また、センター試験で全国平均をとれる「受験学力（基礎力）」があれば、国公立大学のみでなく、有名私立大は別としても、多くの私立大学や短大合格の可能性は大きいと思われる。先に掲げた「日本の科学者」の中の大

西論文にある、「共通一次」や「大学入試センター入試」をはじめ狭義に解釈される「学力」を軽視すべきでない」という指摘も、大学教育を受けるのに必要な「学力」レベルとしてそう過大とは思われない。

旧制中学からの進学校のトップ層は別として県内の多くの学校では、生徒の学習の問題点として、自宅学習時間の絶対的不足、予習の欠如（中学校的学習）があげられる。大学進学を希望しながら、教科書内容も十分理解できない学力状況にある生徒が多いことである。ことに数学での学力不足は、八木論文にあるように小・中学校との関連が深く高校だけではカバーできない面ももっている。

また、トップ層の進学校以外では、新潟大学志望者が圧倒的に多く、それが入試センター試験で四教型受験（新潟大学は四教科を課す学部・学科が多い）が多く、他の国公立大への受験への弱さや、総合的学力不足の一因とも

なっている。

学習不足・学力不足の背景には、高校での授業の質や指導力不足がないとは言えないが、子ども達の自主性や自立心形成の弱さから、自分の力では学習を日常的に持続させられない面を多くの教員や父母が指摘している。そのことが、「大学等推進会議」等での、教員・父母の努力で「早期に大学進学をめざさせよ」とか、子ども達の自発性にまつのではなく、「可児高校」方式の受験体制をという声の背景ともなっている。

進学者が多いからといって、「可児高校」方式でやれる道理はなく、何よりも、八木論文の指摘のように校内での「大学進学を希望するものには相應の学力を、就職したいもののためにはそれにふさわしい学力と見識をつけてやるのは当然の学校の仕事」という共通認識を形成し、学校が父母の声を反映しながら、独自に「学力」の保障に取り組むことが、今とめられること

であると思う。

「大学に行きたい」願いにこたえて

かつて共通一次試験が導入された頃、勤務校では年々国公立大学進学者が増えた（と言っても全体の一割に達しない）ことがある。そのためカリキュラムも共通一次にシフトし、進学ガイダンスも共通一次試験対策が前面に出た時期がある。その頃、担任をしていた、国公立大学には浪人してもとても無理と思える生徒が、希望先として国公立大学に固執したので、「私立大学はダメなの」と聞いたところ、「どの先生も国公立大受験の話しかしない。私立大学希望ではちゃんと進学指導してもらえないと思うから」と言われ、非常にショックを受けたことがある。これに類した話は他校出身の生徒から今でも聞く話である。

今、進路指導部において、県の「大学等進学率向上対策事業」対象校としてプレッシャーを受けながら、「学力の

向上」をめざして取り組んでいる、取り組もうとしていることを少し紹介してまとめたい。

(1) 「私立大学進学」を重視した指導

本校の生徒の進学実態を意識してのことであるが、「国公立大学何名合格」という学校間の進学競争にふりまわされず、専門学校進学を含め、一人一人の進学希望にいていねいに対応しているという実践的意味をもっている。

(2) 国語力向上をめざした「小論文・作文」指導への試み

カリキュラム編成協議で、各教科から共通に出されたのが、国語力の弱さであったことを受け、受験への対応にとどまらず、読解力・表現力をつけようと、本年度から、各学年との協議の上、小論文・作文指導に取り組みはじめている。

(3) 校内のコンセンサスづくり

進路指導部方針を初めて文章化し、年度初めに提示した。その中で、学年・教科との連携を上げ、今取り組んで

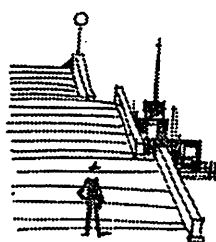
いる。学年での合意づくり、教科内での学力協議のきっかけにしていければと考えている。共通の課題となっているのは、自宅学習の習慣化、予習の徹底である。

(4) 教員研修会の開催

昨年は、リクルートの「キャリアガイダンス」編集者を招き、大学卒業後の就職状況と大学教育の役割について話してもらい研修を行った。今年度は、福武書店（進研模試）の人を依頼し、「受験学力」の分析と全国状況について研修する予定である。

これらの取り組みを通して私としては、教職員が「進学率の向上」や国公立大学合格何人をめざす「受験体制」のみに目を奪われず、「学力の向上」の論議に発展することを期待している。

特に、八木論文の指摘の「学校の先生は本質的に予備校の講師のように職業的な受験専門家になれない」は、進路指導部において、予備校と接触が多いため、元大学教官を含む講師や専門的



な模試問題作成能力には及ばないことは実感できるし、同じになる必要も感じない。受験に必要な高校での基礎的知識の既習を前提とした予備校の講習と高校の授業は本質的に違うと考えている。

「受験学力」を越えさせる教科指導、授業づくりに、これまで正面から実践的に議論されてきていない。いわゆる「可児高校」方式を乗り越える上でも、八木氏の「学問的な香りもあり、かつ大学受験にも対応できる高度な授業内容」、「生徒を主体的に参加させ」られる授業の創造を中心課題として、学校内外で進めたいと思う。

(みつい ふじお 県立新潟江南高等学校)

現人神 (あらひとがみ)

「おれは五年生のときから、神様だなんて思っていなかった」

「まさか!」「ほんと?」

「天皇Ⅱ現人神」を信じてなかったというU君に、不審の顔を向けました。五十年前の戦争最末期の小学校六年生だった者の同窓会の宴席。

問われるままにU君は答えました。

「学校で習った『国史』だよ。後醍醐天皇なんか、兄弟げんかや親類と争いばかりやっているじゃない。そんなのが神様であるはずがないと思ったんだ」

「へえー、誰かに言わなかった」

「親父やおふくろにしゃべったら外では言うなよ。家のなかだけにしておけといわれたな」

U君の父は、上越線K駅前にパン屋を開いていた職人氣質の人でした。お

ふくろさんも庶民の典型のような人です。

学校では、その頃しょっちゅう「テンノウヘイカ(Ⅱ天皇)ハ」「気ヲツケッ」というような具合で、条件反射のように身体がうごいて、「天皇Ⅱ現人神」は疑いのないことでした。

つい先日、二十代の人に「NHK、春よ来い」の春希も母親のリュウも天皇を神と信じていたようだが、ほんとにそうだったのか」と聞かれて、なぜそうだったのかはうまく説明できず、納得してもらえませんでした。戦後も半世紀になります。

それにしても、あの時代でもU君のように考え、それを否定しなかった親が身近にいたことを知ったのは愉快でした。U君は家業を継いでいます。

(Y)